

思考抑制と曖昧さ耐性が強迫傾向に及ぼす影響

清水健司（信州大学人文学部）
清水寿代（広島大学大学院教育学研究科）

キーワード：強迫傾向，思考抑制，曖昧さ耐性

The effect of thought suppression and tolerance of ambiguity on obsessive-compulsive tendency

Kenji, SHIMIZU (Faculty of Arts, Shinshu University)
Hisayo, SHIMIZU (Department of Education, Hiroshima University)

Key words : obsessive-compulsive tendency, thought suppression, tolerance of ambiguity

問題

我々は、自分の思考内容を幾度となく吟味する、あるいは行動の結果を繰り返し確認することで、不注意によるミスを未然に防ぐ努力をしている。これらは、自らの思考・行動に一定の注意資源を配分してエラーを検閲する行為であり、一般社会においても推奨されることが多いものである。ただし、当該行為がその強度・頻度において適切な範囲を逸脱する水準にまで至ると、皮肉にも検閲そのものが逆に自分自身の首を絞めることになる。仮に、思考への疑念が払拭できないために一切の物事が決断できない、あるいは延々と続く確認行動のために重要な案件に全く手がつけられず、日常生活機能の低下にまで影響が及ぶのであれば、強迫症／強迫性障害（Obsessive-Compulsive Disorder；以下 OCD）と呼ばれることになる。

OCD は、強迫観念・強迫行為の存在によって特徴づけられる精神疾患である。強迫観念とは、繰り返し浮かんでくる観念・思考・衝動で、侵入的かつ不適切なものとして体験され、不安や苦痛を引き起こすものである。また、強迫行為とは、反復行動・心的行為で、本来は不安・苦痛の軽減を目的としているはずが、結果的に症状維持・悪化に寄与する行動のことを指している（American Psychiatric Association, 2013）。このような強迫観念や強迫行為は、OCD の主要症状として病理的な水準に至るものであるが、一方で健常者にも見られる類似の心理的傾向として、強迫傾向（Obsessive-Compulsive Tendency）の存在が指摘されている（李・下山, 2008）。これは、日常生活の障壁になるほどの水準ではなく、頻度・強度・苦痛度において比較的軽い性質を持つものである。しかし、OCD 患者の症状と質的には同じもので、同次元上に並べられるものだと捉えられている。仮に強迫傾向への適切な対応を失敗し続けるのであれば、慢性化することで OCD にも繋がりがかねない危険性を孕んでい

る。

そのため、強迫傾向のリスク因子の検討には、当該傾向を強く持つ健常者への予防策の言及、およびOCD患者に対する治療的な示唆への期待において大きな社会的意義を有していると考えられる。そこで本研究では、アナログ研究として健常群における強迫傾向に実証的検討を加え、その増減要因を推定することを目的とする。

通常、強迫症状を測定する場合は、自己記入式質問票である Leyton Obsessional Inventory (LOI) や Maudsley Obsessive-Compulsive Inventory (MOCI) の邦訳版 (吉田・切池・永田・松永・山上, 1995) が使用されることが多い。また, Sanavio (1988) は、全60項目からなる Padua Inventory (以下, PI) を開発しており、すでに高い信頼性・妥当性が確認されている。この PI は、LOI および MOCI に比較すると、項目内容の偏りや因子構造の不安定性が克服されている点、病的な強迫症状を捉えるのに適している点において有用性が見出されている (鈴木, 2004)。そして杉浦・丹野 (2000) は、この PI における邦訳版として「疑惑 (doubt)」「衝動 (impulse)」「確認 (check)」「汚染 (dirt)」「正確 (precision)」の5件法・5下位尺度から構成される日本語版 Padua Inventory (以下, J-PI) を作成している。この J-PI は OCD を含む精神病理のアナログ研究ツールとして認知行動療法の予防的・治療的観点からその発展を大きく期待されているところである。

また、鈴木 (2002) では J-PI を用いて男女差の検討がなされており、鈴木 (2004) においては、J-PI が持つ問題として質問項目数の多さや、項目の表現として全員が回答できるとは限らないものが混入していることを指摘した上で、32項目からなる短縮版の作成が試みられている。

しかし、OCD が従来から極めて稀な精神疾患として扱われてきた歴史が示すように、たとえ J-PI であっても、どうしても質問項目の内容が日常生活の感覚からずれてしまうという大きな問題が残されている。これは項目の回答分布を精査することで明確になるものであるが、J-PI は回答分布が左側に偏りやすいという性質を持っている。つまり、5件法 (0~4 の範囲で回答を選択) であるにも関わらず“全く煩わされない (0)”が選択される確率が高くなることで分布の正規性が歪んでしまい、更にその中には回答そのものが不可能だった人々も混入している可能性を否定できないという問題がある。このように、有用性が見出される J-PI であっても状況依存的な質問項目、あるいは日常生活から遠く離れた内容を示す質問項目が含まれているため、多変量解析などの分析手法で増減要因を検討する際に変数の予測が困難になることが懸念されている。

そのため、特定状況に限定されない、または日常生活に近い感覚を惹起させる強迫傾向の測定ツールの作成は、今後のアナログ研究の発展において強く望まれるところである。本研究では強迫傾向の対象を一般健常青年とし、日常的な意味の範疇にある強迫傾向を測定できるツールを J-PI の中から抽出することとした。そして、同時に強迫傾向の増減要因となり得る変数の予測についても検討を行う。

では、一体どのような要因が強迫傾向の増減に関わりを持つのであろうか。まず本研究では、リスク要因として思考抑制 (Thought suppression) を取り上げる。思考抑制とは思考・感情といった認知レベルにおける抑制的な対処のことを指す。例えば、自分の頭に浮かんだ思考に違和感を覚え (侵入思考)、当該の思考を頭の中から意図的に締め出そうとすること

がこれに該当する。人は、思い出したくない思考内容を意識上に置き続けておくとき精神的な苦痛が生じやすくなる (Clark, 2005 丹野監訳 2006)。そのため、古来より抑圧 (Repression) に見られる防衛機制によって個人の適応を調整するように、我々は少なからず抑制的対処を用いることで社会的適応を保っているとも言える。しかし Wegner, Schneider, Carter, & White (1987) の皮肉過程理論 (Ironical process theory) では、思考抑制を試みると却って反意図的な侵入思考が増加することが示唆されている。これは、自らの思考を抑えようと苦心するために思考が制御困難になる過程であり、具体例としては禁煙・禁酒・ダイエットを試みた途端、制御が困難なほどの反動的欲求に圧倒される (及川, 2011) 現象が挙げられる。これらは抑制の逆説的効果とも呼ばれるもので、OCD における強迫観念および強迫行為の発生・維持にも、この思考抑制が大きく関連していることが考えられる。

そして、森田 (2004) においては、負けず嫌いな自分自身を受容することが出来ず、現状の自分に抗い、そのために逆に不安が増強される“とらわれ”という現象が紹介されている。この“とらわれ”を予防する機能を持つパーソナリティ特性としては、物事に対して白黒をつけないでも済む度量を持ち合わせるといった、曖昧さへの態度が挙げられる。前述の抑制の逆説的効果を生む要因には、何事に対しても白黒をはっきりさせたい完全主義的な認知様式が関連することが知られている。北西 (2001) は、“我執”という自らの思考に執着し、柔軟性を欠くほどまでに拘ることが、結果的に自分自身の思考の制御困難性につながることを指摘している。また西村 (2007) では、曖昧さ耐性 (tolerance of ambiguity) が取り上げられ、曖昧な状況に対する態度として、享受・不安・受容・統制・排除という多次元的な構造を持つことが想定されている。本研究では、このうちの曖昧さをそのまま認めて受け入れられ、親和性や寛容性を保持することが可能な“曖昧さの受容”を取り上げる。これは変化を続ける状況に対して柔軟性を持ち、かつ必ずしも物事を割り切らなくてもよいという度量を示すもので、適応的な性質を帯びるものだと考えられる。

本研究では強迫傾向を増強する対処方略として思考抑制を、低減に資するパーソナリティとして曖昧さの受容を想定することで実証的な検討を行う。これによって強迫傾向およびOCDの予防的・治療的な示唆に言及することを目的とする。

方法

調査参加者 A県内の大学生のうち、調査に対する同意が得られた216名 (男性：68名、女性：148名) を対象とした。平均年齢は19.82歳 ($SD=1.58$ 歳) であった。

日本語版 Padua Inventory (J-PI) 強迫傾向を測定するため、杉浦・丹野 (2000) によって邦訳されたJ-PIを用いた。J-PIは全60項目から構成されているが、本研究では項目平均得点が著しく低い項目、もしくは分布の歪みが大きな項目、もしくは複数の因子に負荷量を示す項目を杉浦・丹野 (2000) を参考にしてあらかじめ除外することとした。その結果、21項目が除外され、残りの39項目について“全く煩わされない (0)”から“非常に煩わされる (4)”の5件法で回答を求めた。

思考抑制尺度 自らの感情や思考活動を意図的に意識から追い出そうとする方略の強さを測定するため、Wegner & Zanakos (1994) による White Bear Suppression Inventory (WBSI) を

用いた。松本（2008）によって邦訳された15項目（ex. あることを考えるのを止めれたらと思うことがある）について“全くあてはまらない（1）”から“非常にあてはまる（5）”の5件法で回答を求めた。

曖昧さの受容尺度 西村（2007）による曖昧さへの態度尺度のうち、曖昧さの受容因子に該当する5項目（ex. はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある）について“全くあてはまらない（1）”から“非常にあてはまる（6）”の6件法で回答を求めた。

結果

因子分析 本研究では日常生活において頻繁に意識される水準での強迫傾向を対象とするため、J-PIの39項目について歪度が1を超える項目は以後の分析から除外することとした。その結果、18項目が除外されることとなった。この18項目全てで分布が左側に大きく偏っており、多くの人が“全く煩わされない”を選択していることから、一般的な内容とは言い難いものと判断された。例えば“電車が近づいて来るのを見ると、レールに飛び込む衝動を感じる”または“武器を見ると刺激されて、暴力的なことを考えてしまう”などがこれに含まれており、前者は駅で電車を待っているという限定された場面である点、後者は日本社会の日常的な光景からやや乖離した内容であるためだと考えられた。そして、残った21項目に対して因子分析（最尤法－Promax回転）を実施し、固有値1以上を抽出基準とした結果、3因子が抽出された。

第1因子（Factor1）は、自分自身の中に振り払い難い思考を持っており、それが連鎖している様子を表していたため“強迫観念傾向”と命名した。また、第2因子（Factor2）は自分自身の行為の結果を何度も確認する様子を表していたため“強迫行為傾向”と命名した。そして、第3因子（Factor3）は自分自身が汚いと感じる対象への心配を表していたため“汚染不安”と命名した。この3因子における全体の累積説明率は54.03%で、因子間相関は.52～.69の範囲にあることから互いに中程度の正の関連を持つことがうかがえた。最終的な因子分析の結果をTable 1に示した。

次に、思考抑制尺度に対して因子分析（最尤法）を行ったところ、固有値の減衰状況から1因子構造を最適解とした。全15項目が十分な因子負荷量を示し、累積説明率も50.36%となっていた。また、曖昧さの受容尺度に対しても因子分析（最尤法）を行ったところ、固有値の減衰状況から1因子構造を最適解とした。全5項目が十分な因子負荷量を示し、累積説明率も55.13%となっていた。

相関分析 各因子に該当する項目の合計得点を算出し、各々の平均値、標準偏差、 α 係数および各尺度あるいは下位尺度間の相関係数をTable 2に示した。また、全尺度に対してShapiro-Wilksの分布の正規性の検討を行った。その結果、極端な偏りがあることが明確に示された測定尺度は1つも見られなかった。特に強迫傾向に関しては、一般的な範囲における測定ツールとするためJ-PIから分布に問題のない項目を抽出したことを考慮すると、十分に本研究のねらいを満たすものだと考えられた。

測定尺度間の相関係数については、思考抑制と曖昧さの受容に有意な相関は認められず（ $r = .046$, n.s.）、互いに独立した関係であることが示された。また、思考抑制と強迫傾向

Table 1
日本語版 Padua Inventory (J-PI) における因子分析 (最尤法 -Promax 回転) の結果

No. 質問項目	Factor1	Factor2	Factor3
35 私の頭脳はいつも勝手に動いて、周囲でおきていることに注意を払うのが難しい。	.845	-.148	-.046
31 自分がするほとんどのことに不審や疑問を抱いてしまう。	.823	.071	-.079
33 不快な考えが意に反して頭に浮かんできて、それらを取り除くことができない。	.766	-.093	.190
45 ある特定の場面で、自分のコントロールを失い、恥ずかしいことをしてしまうのではないかと恐れる。	.755	.031	-.050
28 自分は物事を決して明確に説明できないだろうと感じる。特に自分にとって重要なことを話すときにそうである。	.657	-.034	.037
37 知らないうちに誰かを傷つけたのではないかと、くどくどと考えてしまう。	.613	.122	.012
26 たとえ重要でない事項についても、決断するのを難しく感じる。	.591	-.042	.088
32 あることについて考え始めるとそれに取りつかれてしまう。	.573	.196	-.058
39 自分の体の具合が悪いのではないかと、理由もなく、くどくどと気にやむことがある。	.555	-.037	.191
52 自分の中に、全く無意味で、自分がしたくないようなことに駆り立てられるものを感じる時がある。	.534	.102	.070
36 自分のうっかりや、小さなミスのために破局的な結果が生じることを考えてしまう。	.458	.397	-.036
22 書類や小切手などを確実に正しく記入したかどうか、細部にわたって何度も確認する。	-.252	.878	.144
25 ポストに入れる前に、手紙を何回も注意深く確認する。	-.082	.846	.015
19 必要以上に確認を繰り返す傾向がある。	.098	.695	.086
29 何かを注意深くやった後でも、まずいやり方をしたとか、完了していないのではないかと感じる。	.292	.610	-.116
44 ある考えや疑惑が心に浮かぶと、あらゆる観点から吟味しないと気が済まない。	.292	.548	-.122
27 実際にはやったと分かっていることを、本当にやったかどうか確信できないことがある。	.210	.425	.066
9 「汚染されている」と思うものに触ると、すぐに自分の体を洗ったり、清潔にしたりせずにはいられない。	-.029	.086	.764
2 汗や唾や小便などに少しでも触れると、服が汚れたとか、私にとって何らかの害になるだろうと思う。	.001	-.008	.759
60 ばい菌や病気について無用の心配を抱いてしまう。	.160	-.068	.654
3 ある特定の人が触ったと分かっている物には触りたくないと感じる。	-.003	.104	.649
累積説明率			
42.966 49.164 54.033			
因子間相関	Fac1	-	
	Fac2	.693	-
	Fac3	.526	.523 -

*Note. 左端の No. は、杉浦・丹野 (2000) の J-PI における項目番号

Table 2
各変数間における相関係数、および各変数の平均値、標準偏差、 α 係数

	思考抑制	曖昧さの受容	強迫観念傾向	強迫行為傾向	汚染不安	M	SD	α 係数
思考抑制	-					47.41	12.42	.928
曖昧さの受容	.046	-				20.12	4.04	.777
強迫観念傾向	.564 *	-.063	-			28.78	10.17	.914
強迫行為傾向	.355 *	-.180 *	.757 *	-		16.16	5.92	.876
汚染不安	.183 *	-.196 *	.534 *	.514 *	-	9.30	4.01	.829

* $p < .05$

の3下位尺度間では、強迫観念傾向と中程度の正の相関 ($r = .564$)、強迫行為傾向と弱い正の相関 ($r = .355$)、汚染不安とは直線的な関連はほぼ認められなかった ($r = .183$)。そして、曖昧さの受容と強迫傾向の3下位尺度間では、いずれも負の相関係数が示されているが、全てにおいて弱い値しか確認されず、直線的な関連は認められなかった ($r = -.063 \sim -.196$)。

階層的重回帰分析 思考抑制と曖昧さの受容が強迫傾向に与える影響を検討するため、従属変数として J-PI から抽出した各3下位尺度を投入し、Step1に統制変数として性別及び年齢、Step2に思考抑制と曖昧さの受容尺度にセンタリング処理を行った主効果項、Step3にその積

Table 3
思考抑制と曖昧さの受容が強迫観念傾向に与える影響

	投入変数	回帰係数	ΔR^2	R^2
Step1	性別	-.422	.006	.006
	年齢	.343		
Step2	曖昧さの受容	-.174	.235 *	.240
	思考抑制	.784 *		
Step3	曖昧さの受容 × 思考抑制	-.049 *	.024 *	.265
切片		28.899 *		

* $p < .05$

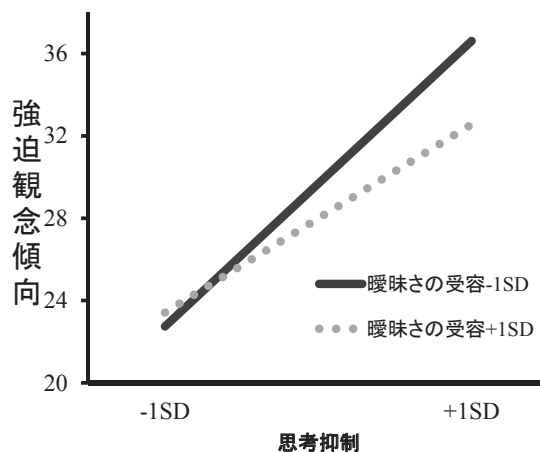


Figure 1. 強迫観念傾向に及ぼす思考抑制と曖昧さの受容の影響

を交互作用項として投入した階層的重回帰分析を行った。

その結果、強迫観念傾向では、思考抑制の主効果 ($B = .784, p < .05$) と曖昧さの受容 × 思考抑制の交互作用項 ($B = -.049, p < .05$) が有意であった (Table 3)。そして、交互作用項が有意であったため単純傾斜の検定を行った結果、曖昧さの受容低群 ($-1SD$) において有意な単回帰直線 ($B = .984, t = 7.848, p < .05$) が見られ、曖昧さの受容高群 ($+1SD$) においても有意な単回帰直線 ($B = .585, t = 5.005, p < .05$) が認められた (Figure 1)。

次に、強迫行為傾向では、思考抑制の主効果 ($B = .200, p < .05$) と曖昧さの受容 ($B = -.254, p < .05$) の主効果と、思考抑制 × 曖昧さの受容の交互作用項 ($B = -.021, p < .05$) が有意であった (Table 4)。そして、単純傾斜の検定を行った結果、曖昧さの受容低群 ($-1SD$) において有意な単回帰直線 ($B = .284, t = 4.190, p < .05$) が見られたが、曖昧さの受容高群 ($+1SD$) においては有意な単回帰直線 ($B = .117, t = 1.863, p = .064$) は認められなかった (Figure 2)。

そして汚染不安では、曖昧さの受容の主効果 ($B = -.205, p < .05$) のみが有意であった (Table 5)。なお、性別および年齢は全ての強迫傾向尺度に対して有意な説明率の増加を示

Table 4
思考抑制と曖昧さの受容が強迫行為傾向に与える影響

	投入変数	回帰係数	ΔR^2	R^2
Step1	性別	-.337	.002	.002
	年齢	.126		
Step2	曖昧さの受容	-.254 *	.100 *	.103
	思考抑制	.200 *		
Step3	曖昧さの受容 × 思考抑制	-.021 *	.017 *	.120
切片		13.275 *		

* $p < .05$

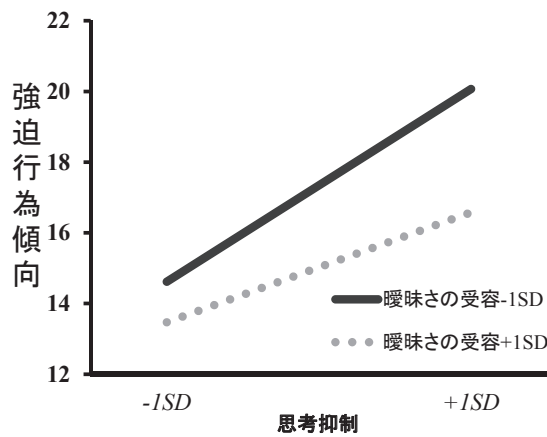


Figure 2. 強迫行為傾向に及ぼす思考抑制と曖昧さの受容の影響

Table 5
思考抑制と曖昧さの受容が汚染不安に与える影響

	投入変数	回帰係数	ΔR^2	R^2
Step1	性別	1.050	.017	.017
	年齢	.060		
Step2	曖昧さの受容	-.205 *	.058 *	.074
	思考抑制	.082		
Step3	曖昧さの受容 × 思考抑制	-.004	.001	.076
切片		9.106 *		

* $p < .05$

さなかった。本研究においては、これらの変数が強迫傾向の増減に直接的な影響を与えるわけではないことが示唆された。

考察

強迫傾向尺度の作成 本研究では、杉浦・丹野（2000）による J-PI から回答分布に著しい偏りを持つ項目を削除し、その後因子分析を行って健常青年における一般的な意味での強迫傾向尺度を整理した。分析の過程で削除された項目（歪度が1を超える項目）に着目すると、回答分布が左側に著しく偏っており、ガスや水道をきちんと閉めること、橋の上から飛び降り衝動を意識することなど、状況が詳細に限定されている項目が大部分を占めていた。もちろん、これらは強迫症状を正確に把握するためには有効な質問項目であると思われるが、健常青年を対象とした強迫傾向の測定となると回答自体が難しくなるケースが推測された。また本研究で抽出された質問項目（Table 1）は、自分自身に対する体験に関するものが多く、たとえ状況の場面が提示されていても大多数の人々が経験するものであったため、分布の正規性が保たれたと考えられる。

また、杉浦・丹野（2000）による J-PI は5因子構造を成しているが、本研究では因子数が減少して3因子構造となっていた。強迫観念傾向は、J-PI で疑惑（doubt）に属していた10項目と衝動（impulse）に属していた1項目の計11項目から構成されていた。また、強迫行為傾向は疑惑に属していた3項目と確認（check）に属していた3項目の計6項目から構成されていた。そして汚染不安では汚染（dirt）に属していた4項目のみから構成されていた。そのため、本研究の強迫傾向尺度は杉浦・丹野（2000）の J-PI に比較すると、衝動と正確（precision）の2因子からはほとんど内容が反映されておらず、多くは疑惑・確認・汚染から質問項目が抽出されていることになる。これは OCD の強迫症状のうち、衝動性を意識することで不安が喚起されること（衝動）、または特定のルーティンに固執せざるを得ない苦痛（正確）に関しては、カバーできていないことに留意する必要があるだろう。しかし、OCD の主要症状である強迫観念・強迫行為の2領域が十分に網羅されていることを考えると、簡便かつ汎用性の高い強迫傾向尺度であると思われる。

強迫傾向の増減要因 強迫観念傾向および強迫行為傾向においては有意な交互作用項が見られ、思考抑制を頻繁に使用すること、かつ曖昧な状況を受容できずに嫌悪対象と認知することが強迫傾向の脆弱性要因になることが示された。本来、日常生活におけるほとんどの状況は曖昧模糊としたものであり、その中で意思決定を行うためには色々な情報を集め、誰もが苦しみ迷いながら決断に至るものである。しかしながら、当該状況を受容できない態度を一貫して持ち続けると、ほとんどの現実場面嫌悪感情と直面せざるを得なくなってしまう。その上、思考抑制によって自分自身の嫌悪感情を無理に抑制しようとすると、そこに過剰な注意が向けられることになる。その結果、意図とは逆に強迫観念傾向・強迫行為傾向が増強されてしまい、それらは消失どころか強い連鎖を形成して悪循環に至ると考えられる。これは、自分の嫌悪感情に対して思考抑制で対処することは決して得策とは言えないことを強く説く結果でもある。

森田療法の観点から考えると、強迫観念傾向は一時的な不安を喚起しているに過ぎないが、強迫行為傾向は、その一時的な不安を弱めようとする努力（はからい）である。もし仮に不安の完全消失を最終的な目標に掲げるのであれば、ほぼ全ての状況・場面・瞬間において

“はからい”を実行せざるを得ないことになる。また、曖昧さに満ち溢れたこの現実世界において、全か無かの認知スタイルに固執するのは、一握りの不安も残せないという無理難題に立ち向かっている姿でもあり、更なる悪循環過程を招くことにもなりかねない。強迫傾向を強迫症状にまで発展させないための方略を考える場合、まずは思考抑制に依存しないで済むような様々な行動レパトリーの充実が必要になるであろう。それに加えて、自分の独力で「出来ること」と「出来ないこと」を見極められる視点も同時に必要になってくる。現実世界において全て白黒が明確につけられる瞬間は本来望むべくもないことであり、明らかに後者の「出来ないこと」に分類されるものである。その前提に立つのであれば、「出来ないこと」ではなく実際に「出来ること」に注意資源を多く配分してゆくほうが得策ではないかと思われる。

また汚染不安に関しては、思考抑制によるネガティブな増強効果は見られず、曖昧さの受容のみが低減効果を持つ可能性が示された。汚染不安に関しては、本人が汚いと感じるものに対して一抹の不安は発生するものの、清潔への回復に強く固執する人の数が多数にまでは及ばなかったことが、強迫観念傾向および強迫行為傾向とは異なる結果に至ったものと考えられる。

本研究では、一般健常青年を対象とした強迫傾向尺度を杉浦・丹野（2000）のJ-PIから選出した。そして、強迫観念傾向と強迫行為傾向においては、曖昧な状況が受容できないこと、思考抑制によって不安を安易に低減しようとするものが強迫傾向の悪化要因になることが示唆された。これらの知見は、認知行動療法をはじめとしたOCDの治療・予防に対して有用な知見を提示するものである。今後は、認知的な方略に限らず比較的制御しやすいであろう行動的な方略を含めた検討も望まれる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (5ed.)*. Washington, D.C.; APA
- （アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕（監訳）（2014）. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）
- Clark, D.A. (2005). *Intrusive Thoughts in Clinical Disorders : Theory, Research and Treatment*. Guilford Press.
- （クラーク, D.A. 丹野義彦（監訳）（2006）, 侵入思考——雑念はどのように病理へと発展するのか—— 星和書店）
- 北西憲二（2001）. 我執の病理 ——森田療法による「生きること」の探究—— 白揚社
- 李 曉茹・下山晴彦（2008）. 中国人大学生における強迫傾向と親の養育態度 パーソナリティ研究, 16, 335-349.
- 松本麻友子（2008）. 拡張版反応スタイル尺度の作成 パーソナリティ研究, 16, 209-219.
- 森田正馬（2004）. 新版 神経質の本態と療法 白揚社
- 西村佐彩子（2007）. 曖昧さへの態度の多次元構造の検討 ——曖昧性耐性との比較を通して—— パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- 及川 晴（2011）. 思考抑制の3要素モデル 風間書房
- Sanavio, E. (1988). Obsessions and compulsions : the padua inventory. *Behaviour Research and Therapy* , 26,

169-177.

杉浦義典・丹野義彦 (2000). 強迫症状の自己記入式質問票——日本語版 Padua Inventory の信頼性と妥当性の検討—— 精神科診断学, 11, 175-189.

鈴木公啓 (2002). 健常者における強迫症状の男女差について 性格心理学研究, 11, 50-51.

鈴木公啓 (2004). 日本語短縮版 Padua Inventory (J-PI32) の作成 精神科診断学, 15, 15-24.

Wegner, D.M., Schneider, D.J., Carter, S.R., & White, T.L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 5-13.

Wegner, D. M., & Zanakos, S. (1994). Chronic thought suppression. *Journal of Personality*, 62, 615-640.

吉田充孝・切池信夫・永田利彦・松永寿人・山上榮 (1995). 強迫性障害に対する Maudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI) 邦訳版の有用性について 精神医学, 37, 291-296.

要約

本研究の目的は、白黒がはっきりしない曖昧な状況でも十分に耐えられるパーソナリティ（曖昧さ耐性）と、自分自身の思考を止めようとする対処方略（思考抑制）が、一般健常青年においても見受けられる比較的軽い強迫症状（強迫傾向）にどのような影響を与えるのかを検討することであった。一般大学生216名に質問紙調査を実施した結果、日本語版 Padua Inventory から回答に著しい歪みを示さない21項目を因子分析（最尤法 -Promax 回転）によって整理した。第1因子は持続的に生じる思考・衝動・イメージである「強迫観念傾向」、第2因子は繰り返される行動または心の中の行為で何度も確認をする「強迫行為傾向」、第3因子は何らかの物質に汚染されることを恐れる「汚染不安」であり、3下位尺度とも Shapiro-Wilks の分布の正規性の検討から極端な偏りは見られないことが確認された。

また、パーソナリティとしての曖昧さ耐性と対処方略としての思考抑制が、強迫傾向に与える影響を検討するため階層的重回帰分析を行った。その結果、強迫観念傾向および強迫行為傾向において、曖昧さ耐性に弱さを持つ場合、かつ思考抑制を頻繁に用いる場合において有意な増加傾向が見られることが示唆された。あくまで日常的な水準に留まる強迫傾向ではあるが、強迫症状へと発展させないためには、曖昧状況への耐性を育成すること、同時に思考抑制に固執しないで済むような適切な対処方略の充実がポイントになると考えられる。

(2016年10月31日受理, 12月13日掲載承認)